



▲比叡山遠景

歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。  
第五巻「文化財編」は平成十九年二月に刊行予定でしたが、諸事情により刊行が遅れています。大変申し訳ありませんが、今しばらくお待ちください。刊行が決まり次第、皆さんにお知らせいたします。

今回は、『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」の古代編第四章「平安時代の蒲生郡」をご紹介します。

### 比叡山の力・天台宗の誕生

都が大和から京・平安京に遷ったころ、日本の仏教界に大きな動きが発生しました。それは、最澄の天台宗と空海の真言宗という新しい宗教の興りでした。六世紀中ごろに伝わったとされる仏教は、

南都（奈良）で盛んになりましたが、奈良時代後半には教団と政治が結びつき末期的な状態になっていました。

若くして国家僧となった最澄は、そんな状態を憂いて、『古事記』に「日枝」と記された古くからの霊山・比叡山で厳しい修行を積みました。その後、唐（中国）で禅や密教を学び、帰国後に比叡山で天台宗を開宗しました。比叡山のお膝元である近江は、この天台宗の影響が最も強い国の一つであったといえます。

### 太子開基伝承と天台寺院

天台宗が最澄により開宗されたことにより、近江の各地で天台寺院の建立が始まりました。しかし、寺院の変遷をみると、実は奈良時代に作られたという寺院が、平安時代に天台仏教の影響を受けて天台寺院になったという例が多いといえます。



▲正明寺の聖徳太子童像(松尾)

町内には、日本仏教の祖として仰がれた聖徳太子が開いたと伝わる寺院がいくつもあります。中でも西明寺（西明寺）や正明寺（松尾）には、かつて天台寺院であった歴史がみられます。西明寺は、聖徳太子が開いた大安楽寺の別院でしたが、その後比叡山延暦寺の僧照源が当寺で修行して以来、天台宗系寺院になったといわれています。正明寺も聖徳太子の開基伝承がありますが、本堂内陣にある本尊の安置形態、すなわち本尊に木造千手観音立像・脇侍に木造不動明王と木造毘沙門天立像が安置されるという天台系寺院の典型的な形が見られ、かつて天台寺院

であったことを今に伝えていています。現在は西明寺が臨済宗、正明寺が黄檗宗にそれぞれ属しているように、転派する以前に天台寺院であったという由緒がある寺院は町内に十五カ寺を数えます。

### 神仏と荘園 天台勢力の名残

宗教活動が活発になってくると、大勢の僧の生活や法儀・供料などに多くの経費が必要となります。その供給源は荘園からの年貢であり、延暦寺も布教活動を行うとともに「山門（延暦寺）領」といわれる荘園を全国に設置しました。それらの多くは天台宗を支持する撰閥家から寄進されたもので、日野町内の「必佐荘」（現在の必佐・南比都佐）もその一つであったといわれています。

また、天台宗の護法神であった日吉神社も同じく荘園をもち、そこには日吉神社が分祀されました。町内では、大字小井口・大窪・松尾・上野田・杉・北脇・鎌掛・下駒月に日吉神社あるいは日枝神社・山王宮があり、天台宗・延暦寺の力がいかに強大であったかを物語っています。